

神戸市看護大学 「地（知）の拠点整備（COC）事業」

平成28年度 市民公開講座

共に学び、共に創るコミュニティケアのまちづくり

震災を乗り越えた神戸からの発信 ～「人・地域」のつながり～

**開催日：平成28年11月12日 土曜日
13:00～16:00 (12:30開場)**
会場：須磨区役所 4階多目的会議室

•**第1部：基調講演 (13:10～)**

人づくり・地域づくりがいのちを守る



講師：永坂美晴氏 望海在宅介護支援センター センター長
明石市介護支援連絡会 会長

NHK「おはよう日本」や「ラジオ深夜便」で紹介されました

•**第2部：パネルディスカッション (14:20～)**

震災を乗り越えた神戸からの発信

座長：神戸市看護大学 松葉祥一・石原逸子

パネリスト：

佐々木利雄氏（須磨中部自治会 会長）

川原 博司氏（竜が台ふれあいまちづくり協議会 委員長）

福井 徹 氏（神戸市社会福祉協議会 広報交流課長）

丸一 功光氏（東日本大震災 第一次神戸市災害派遣隊長）

手話通訳
あります

参加費無料です。裏面用紙に必要事項を記入し、
神戸市看護大学事務局までお送りください。

主催：神戸市 共催：ひょうご神戸プラットフォーム協議会※

後援：神戸市須磨区社会福祉協議会

※ひょうご神戸プラットフォームは、地方創生に関する文部科学省の事業で、兵庫県では「地方創生に応える実践力養成
ひょうごプラットフォーム」事業が採択されました。事業協働期間が一体となって地域の課題解決に取り組みます。

兵庫県立大学・神戸市看護大学・園田学園女子大学・兵庫県・神戸市
神戸商工会議所・兵庫県経営者協会・兵庫工業会・神戸新聞社

2016年度 市民公開講座

震災を乗り越えた神戸からの発信～人づくり・地域づくりがいのちを守る～

平成28年11月15日（土）に、神戸市須磨区役所4階多目的会議室において第3回市民公開講座を開催した。今年度は、20年を経過した阪神淡路大震災以降、度重なる大災害を通じ、住民の安全や生活の継続性を守るうえで重要なコミュニティについて考える機会とした。災害を乗り越える地域づくりには、日頃から「人のつながり」「地域のつながり」を意識し、行動することがコミュニティの基盤となる。超高齢社会の中で地域包括ケアシステムの構築が急がれるが、地域の特性や需要にマッチしたシステムのあり方についても考える糸口につながった。

【開会の挨拶】鈴木志津枝（神戸市看護大学 学長）

神戸市看護大学は平成8年4月に開学しました。開学にあたっては、前年に阪神淡路大震災があり開学を見合せたほうがいいとの声もありましたが、神戸市民の皆様や市の関係者の皆様から「市民の健康を守る看護専門職者の育成が重要だ」との声があがり、その熱い思いに支えられ開学に至りました。開学から今年で21年目に当たりますが、10月21日には開学20周年記念式典を開催することができました。市民の皆様、市当局の皆様の支えがあったからこそ、本学は20年歩むことができたと感謝しております。

20年を振り返ると、地域の皆様に教育ボランティアをはじめ学生の教育に関わっていただきなど支えていただきました。また、卒業生が市内の病院に勤務するなど、地域の中で皆様とともに健康について考え、学ばせていただいてきました。これからも神戸市看護大学は、地域の皆様とともに歩み、発展していきたいと考えていますので、どうぞよろしくお願ひします。

今回は、「震災を乗り越えた神戸からの発信～人づくり、地域づくりがいのちを守る～」をテーマに、災害やコミュニティについて、皆様とともに考え、また、今後の教育にも活かしていきたいと思います。本日の講演が皆様にとって有意義な時間になることを祈念いたします。



【開会の挨拶】衣笠 収（神戸市須磨区保健福祉部 部長）

COC事業は、大学と須磨区が連携して地域の発展、人材の育成に取り組んでいるもので、「地域住民とともに学び、ともに創る」をテーマに進めています。

1997年1月17日に起きた阪神淡路大震災から20年の月日が経過しました。震災直後から今日までの歩みの中で、人と人、地域がつながることが社会課題の解決の大きな力になると実感しています。この教訓は神戸市内に留まらず、日本全国に広く発信共有することで、防災意識や緊急時の助け合いの意識につながってきたと思います。

現在は、日本全体が超高齢化という、これまで経験したことのない現実に突入しました。高齢者や要援護者が住み慣れた地域でできるだけ長く暮らしていくよう、地域包括ケアシステムの構築を進めているところですが、まださまざまな課題があるのが現状です。行政としては必要な制度整備をしていくことはもちろんですが、地域において人と人がつながることこそが



大きな力を発揮する時代に来ているのではないかと思います。「地域のつながり」といっても簡単にできることではありません。最も重要なのは、私たち一人ひとりが日々の暮らしの中で「人とつながる」「地域とつながる」ことに豊かさを実感できるという実践の積み重ねが重要ではないかと思います。

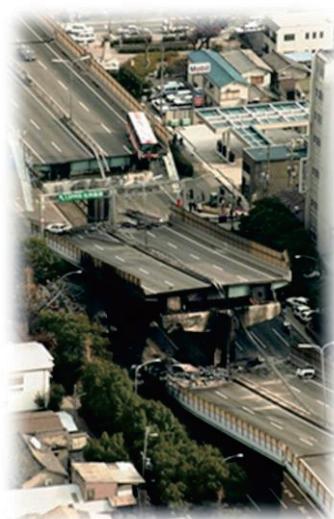
本日のテーマは「震災を乗り越えた神戸からの発信～人づくり、地域づくりがいのちを守る～」です。私たちは震災を乗り越えてきました。これからさまざまな課題に対しても神戸市ならではの乗り越え方ができるのではないかでしょうか。本日の講座は、「人とつながる」「地域とつながる」ことが大きな力になることを考える機会になるのではないかと思いますし、自分ができることを考える機会になればとも思います。本日の COC 市民公開講座に多くの参加者がお見えになり、開催されることをお喜び申し上げます。

基調講演 人づくり、地域づくりがいのちを守る

講師 永坂美晴氏(望海在宅介護支援センター センター長)



<平成7年1月17日、あの日>



1995年1月17日午前5時46分52秒、M7.3の大地震が発生しました。

阪神淡路大震災は、戦後に発生した地震災害の中では東日本大震災に次ぐ規模で、死者は6434名、負傷者は43,792名に達しました。

私が看護専門学校を卒業後初めて就職したのは神戸市立中央市民病院で、震災の直前までは板宿に住んでいました。夫の会社は長田区の火災発生現場のすぐ近くにあり、灘区の実家も被災しました。今は明石市で高齢者の相談活動をしていますが、この仕事には震災の3ヶ月前に就きました。着任時はこんなに長くこの仕事を続けると思っていませんでしたが、震災が私の人生を大きく変えました。今日は「人づくり地域づくりがいのちを守る」というテーマを頂きましたので、私の体験を交えお話をさせていただきます。

<災害時、助けは来るのか、誰が助けるのか>

災害時、本当に助けはくるのでしょうか…、誰が助けるのでしょうか…。災害というと要援護者の方のことを考えますが、災害時というのは誰が動けなくなるのかわからないものだということからお話したいと思います。

1995年1月17日は私にとっても決して忘れられない日です。明石の自宅は大きく傾き、住み慣れた板宿や夫の工場がある長田区は壊滅状態でした。そんな中、仮設住宅ができると生活や健康面の支援が必要になり、震災後1~3年は仮設住宅のケアに奔走しました。



<平成23年3月11日東日本大震災、まちが消えた>

東日本大震災が起きたとき、私はいてもたってもいられず1週間後には被災地に向かいまし

た。最初は施設や病院の人員がどれだけ不足しているのかを調査するために宮城県に入り、福島、岩手の沿岸にも行きました。そして自分がいかに無力であるかを思い知らされました。阪神淡路大震災では焼野原の中で呆然としましたが、東北では町すべてが消えてしまい、その惨状に言葉が出ませんでした。現地に行くと、テレビでは報道されない被害がたくさんあります。東北は5年経っても仮設住宅がまだまだあり、建物が傾いていく現状も目にします。

＜テレビや新聞では報道されていない被害＞

平成27年4月に熊本で地震が起きました。災害では大きな被害のところだけがクローズアップされます。どこにも出ないけれども被害を受けているところがたくさんあります。

阪神淡路大震災のとき、私の家には幼い子ども達がいました。子どもはコタツから出られなくなりました。被災で傾いた家、テレビは震災の画像ばかり、親は仕事に出かける、怖くてコタツから出られない。「お母さん、行かないで」と言えなかつた子ども…。私は心配しながらも「ごめんね、こんなときに出かけて、悪いお母さんで」と言うこともできませんでした。災害時は支援する側もたいへんです。

東北でも子ども達に変化が起きています。相談電話には子どもからどんどん電話がきています。被災地には災害で孤児になった子もいます。親が仕事をなくした家もあります。ここにも子ども達が言えなかつた声がたくさんあります。

＜災害時、人はどこにどのように避難するのか＞

七ヶ浜の中央公民館には1500人くらいの人が避難しました。

指定避難所ではありましたが、職員はまさか1500人が避難してくると思いませんでした。避難してきた人々は次々と自分達で問題の対処をしました。トイレの水が出ないと穴を掘り、動けなくなつた人には介護経験者が介護をし、約半年間避難生活を送りました。公民館の職員の方は「どこの避難所も福祉の避難所になる準備がいるのではないか」と言われていました。

指定避難所は小学校や中学校がほとんどですが、実際に小学校中学校に行く人はわずかです。仮設住宅の支援員130人に調査したところ、中学校14%、小学校は12%で、多くの人は高台の山、お寺や保育所、近くのスーパーなどさまざまなところに避難していました。

＜釜石の奇跡の意味するもの＞

釜石では中学生が小学生の子どもの手を引いて逃げました。釜石東中学校の子どもたちは、学校の防災訓練として大学の先生からミニチュアによる津波の擬似体験を受け、いつどこで災害が起こるかわからぬので、学校ではなく、地域の中で地域の人と一緒に逃げる訓練をしていました。大人たちが少し高いところへ逃げる中、子ども達は「だめ！もっと高いところに行かないと」と逃げました。道路は車が数珠繋ぎで通れませんでしたが、子ども達は

「おじさん、ごめんね、私たち行くね」と車のボンネットを乗り越えて逃げました。高台に逃げると眼下には釜石の町が流れていくのが見えました。「おじさん、ごめんね」と乗り越えてきた車が流れるのが見えました。子ども達はお母さんから「私も高いところに行くから必ず逃げ



なさい」と言わされていました。だから高台へ逃げました。

この釜石の子ども達は「当たり前のこととした」と思っています。放課後訓練したことが役に立っているのです。「津波てんでんこ」は「人に構わずてんでに逃げろ」という意味ではなく、自分の命は自分で守るだけでなく、自分の地域は自分で守る、予め互いの行動をきちんと話し合っておくことの大切さを意味しています。

<人をつなぐ、いのちをつなぐ>

海岸のすぐ近くに立つ老人保健施設には100余命の動けない方がおられました。あの日、ケアマネジャーが車のラジオで津波の危険を知り、施設に「すぐ高台に逃げて！」と電話をしました。職員が高齢者を連れて仙台空港に逃げたところに津波が押し寄せました。1本の電話が100余名のいのちを救ったのです。

仮設住宅で出会ったおばあさんは、震災があったとき孫といっしょにいました。「私の足では行けないので置いていって」と言いましたが、孫が「だめ！」と言い、泣きながら逃げました。高台から下を見ると小さな手が一杯埋まっていました。「私はその子達と変わってやりたかった。でも孫に助けられた命です。この話を伝えることが、私が生きている役目だと思うので、この話を伝えてほしい」と言われました。

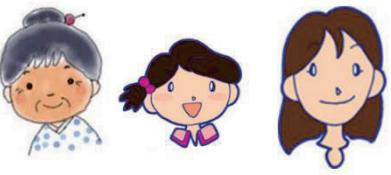
仙台の地域食堂でも、震災後たくさんのボランティアが活躍しました。お米が炊けたのでおにぎりを作つては地域に配りにいきました。調理師の資格をもつ若者や、ほとんど動けなかつたおじいさんも手伝いました。一人ひとりが「自分のできること」をする中で、少しづつ人がつながっていました。コミュニケーションとは一体何でしょうか。「言葉で伝える」だけではなく、傍にいる、存在することだけでもコミュニケーションになるということです。

<あれほど震災で助け合った仲なのに…>

阪神淡路大震災から20年、地域の高齢者の実態はいかがでしょうか。介護保険サービス利用者を対象としたアンケートでは、「指定避難所を知っていますか」という質問に利用者の半数が「知らない」、ケアマネジャーの7割が「担当の利用者さんの指定場所を知らない」と回答しました。要支援（軽度要援護者）の人がシルバーカーを押しながら、避難場所に行く途中には坂や階段もあり移動すると時間がかかります。介護度の重い方だけでなく、足腰が少し弱い人にも十分な声かけや支援がいることを知って準備しないと逃げ遅れます。東北では、「あのおばあさんがいない！」と迎えに行って二次被害にあっています。

ひとり暮らしの方は「誰と一緒に逃げますか」という質問に、27%が家族、13%が民生委員さんと回答し、介護サービスの専門職は0、近隣も0、誰もいないと回答した人が33%でした。それだけ地域の関係が希薄になっています。防災と言いますが、地域づくりはできるのでしょうか。一緒に逃げる人が誰もいない、家族がいても遠方に住んでいて災害時に間に合うでしょうか。独居の利用者さんに聞くと、「ここで死にます。ほつといて」、「今まで知らん顔していたのに今更困ったときだけ『助けて』と言えない」、「避難所はトイレも遠いし生活できない」、「周りもみんな高齢者ばかり。助けてと言えない」と言っておられました。

コミュニケーションとは



存在そのものがコミュニケーション

<介護保険が近隣の関係を希薄にしている?>

地域の高齢者 400 名のアンケートでは、「寂しいと感じる」という回答が、地域の民生委員さんやボランティアが関わっている高齢者 17%に対し、ケアマネジャー や介護保険のサービスが関わっている高齢者は 57% もおられました。これは何でしょうか。介護保険が入ることで、「あそこのおばあちゃん、介護保険のデイサービスに行っているしケアマネジャーがついているから大丈夫」と安心をする、安心するとかかわりが薄くなり、関心が薄れます。

私は仕事で地域の民生委員さんやボランティアの皆さんに育てていただきました。その民生委員さんやボランティアさん達が、「朝、介護の人が高齢者を車でどこかへ連れて行って夜にそっと返しに来る。介護保険がはじまって地域の高齢者が見えなくなった」と言っておられました。今、「地域包括ケアシステム」「地域のつながりが必要」と言いますが、いったいどうしたらしいのでしょうか。行政と専門職と地域住民が真剣に考えないと辿りつかないと思います。

<人づくり、地域づくりのポイント～芋づる式のお宝発見法～>

朝 5 時半から 6 時くらいに地域を廻ると、元気な人は 5 時半くらいから活動しています。「掃除をして、ラジオ体操をして、その後集会所で囲碁をして、今日は 1 日忙しい」と言われます。私たち専門職が地域で転倒予防など健康教室をするのはだいたい午後 1 時半開始ですが、その頃には地域の皆さんはもう 1 日あれこれ活動して、疲れて眠くなっているのです。地域には「このラジオ体操はがんの人が 30 年前に始めて、ずっと続いている」と、それぞれの物語があり、地域ごとにルールがあります。ここはみんなが使うところだから何時には帰る」、「ゴミはきれいに片付ける」…。海辺のラジオ体操では大音響で曲が流れ、90 歳の方もしゃきっとしています。別居の娘さんも一緒に参加して離れたところで見ておられ、「一緒にラジオ体操に行くのが安否確認です」と言われます。海岸の東屋では将棋をしています。「それぞれ、自分の居心地のいい居場所があるのです。地域には「3 分-5 分の法則」があり、徒歩や自



2016/11/04

転車で 5 分以上かかるところには高齢者はほとんど行かないのです。こうした居場所に名前をつけてもらいます。

これから軽度要援護者を対象に「総合事業」が始まりますが、地域住民が生活の延長線上でしていることを専門職がいかに知っているかということや、行政や社協が後方からサポートをするかということが重要です。そして住民が「居場所」に来られなくなった時にどうするのかを決めておくことです。「の人、最近来ないね。どうしているんやろ」という時に専門職につないでもらうつながりが重要です。自分達の行きたいところをしたいことをしてもらいながら、少しだけそれを支えていくことが大切なのです。



<忘れられない、忘れてはいけない痛みと伝える使命～震災復興時の教訓～>

私にはどうしても忘れられないできごとがあります。震災から 2 年後、仮設住宅から復興住宅への移転が始まりました。あるご夫婦は奥さんが仮設住宅で脳梗塞を発症し、私たちが訪問していました。寡黙なご主人でしたが、仮設住宅の人たちが声をかけ、お惣菜を届ける関係が

ありました。ご主人は復興住宅に「行きたくない」と言われましたが、私は「奥さんのためにもバリアフリー住宅は住みやすいよ」と送り出しました。移転後しばらくして、ご夫婦は入水自殺をされました。あまりのショックに、このことは15年ほど誰にも言えませんでした。東日本大震災でボランティアたちが阪神淡路大震災の「言えなかつた痛み」をぽつぽつと話す中で、私も初めて話すことができました。こんな私に何ができるのだろうと思い悩む中で、ある人から「伝えていくことだ」と言われました。こうした経験があつて、人をつなぐことの大切さを伝えています。東北は復興途中で、これから30年かかるかもしれないとも言われています。でも仮設住宅から移るときは決して住民をバラバラにしてはいけません。人のつながりを切り離すことが、本来避けられるはずの孤独死につながることがあります。

〈気になるのは心が寄り添っているから〉

「あるマンションで挨拶をやめようという話がある」と聞き、愕然としました。地域住民のもつ力をつなげるにはどうしたらいいのでしょうか。

地区の住民の集まりで「挨拶がもたらすよいこと」について聞くと「嬉しい」「安否確認ができる」などいろいろあがりました。挨拶や「気にかける」ことが大切なのは当たり前のことですが、皆さんあまり意識していません。専門職はもっと意識していません。地域住民の皆さんの何気ない活動がどんなに地域住民を支えているかを意識することが大切です。立ち話、ラジオ体操は情報交換です。「気になる」というのは心が寄り添っていることです。



最後に、明石市望海地区の活動を少し紹介します。望海地区では住民から座談会で聴き取った地域の生活問題を物語にして地域劇をしています。地域の問題をどうしたらいいのかをみんなで考えます。そしてそれを絵に描いた餅として終わらせません。イベントには企画段階から医師や福祉、消防の専門家、看護学生にも来てもらいます。避難訓練では実際に体育館に寝るなど体験します。体育館に寝てみるととても冷えます。

こうした活動を通して、次第に地域が「自分達のいのちは自分達で守ろうよ」という動きが出てきました。住民主体の集まりから「こういう話をしてほしい」と専門職にリクエストがきて、私も毎月話をしに行きます。地域が「自分達で何とか地域を守る」というふうに変わりつつあります。それが地域包括ケアシステムの基盤ではないかと思います。

災害時のいのちをつなぐものは、「建物」、「モノ」、そして「人のつながりづくり」です。災害は避けられません。そして災害は突然訪れます。今なら、「あの時にああしておけばよかった…」という後悔に対し、備える時間はあるのです。

市民公開講座 パネルディスカッション（震災を乗り越えた神戸からの発信）

座長：松葉祥一（神戸市看護大学 教授・図書館長）

石原逸子（神戸市看護大学 教授・学生部長）

<座長>

本学 COC 事業の目標の 1 つにコミュニティ育成支援がある。今日は「地域包括ケアシステムにおける互助」「地域のつながりの重要性」「高齢化が進む中、コミュニティに求められるもの」の 3 つのテーマを設定し、災害に強い地域づくりに向け、災害時、復興時、そして基盤づくりにおいて重要な取り組みについて、市民や専門機関の方々とディスカッションを行いたい。

<須磨区中部自治会 会長 佐々木利雄氏> 須磨区中部自治会の取り組み

須磨区中部自治会は現在 500 世帯あり、一戸建て住宅や公園が多く、28% が 70 歳以上である。自治会では大黒地区防災福祉コミュニティを結成し毎年 訓練を実施している。震災時、地区の 85% が全焼、全半壊し、850 世帯のうち 52 名が死亡した。真っ暗な中、全壊した家、燃えている家から住民を救出し、その後避難所で 1 つずつ問題に対応した。避難所では部屋ごとにグループを作り、主副リーダーを決め、不公平の声があがらないよう組織活動を行った。2 月には学校が再開し学校と避難住民とが共同して生活した。外部からのボランティアは半分以上断わった。避難所では冷たいカチカチのお弁当で体調を崩す人もあり、自分達で食べられるものを作りたいと、「炊き出しそれよりお金を送ってください、自分達でします」と言った。怒る人が多かったが、中には協力してくれる人がいた。支援金で必要人数分の下着を購入して配布した。近隣の支援者には避難住民の洗濯をお願いした。避難所ではそういう支援が必要で嬉しかった。地区では、その後「地域が安全でありたい」「いい環境をつくりたい」という共通目標をもち、複数の団体が防犯パトロールや学校の校長も交え地域の情報交換をしている。その他にも学校応援団としての登下校の立番、ゴミ分別などの環境整備、寺子屋の開設等、さまざまな活動を行っている。



<竜が台ふれあいの街づくり協議会 会長 川原博司氏> 竜が台地区の取り組み

竜が台地区は約 40 年前に名谷に開発した住宅団地で、2300 世帯、人口 4500 人、高齢化率は 35.9% である。阪神淡路大震災ではほとんど被害がなかったが、本地区で地震発生時に最も問題になるのは家具転倒事故や火災等だと想定している。竜が台ふれあいのまちづくり協議会（以下、「協議会」とする）は、「高齢化」「核家族化」といった地域の課題に対し、「安全で安心なまちづくり」を目的に、複数の多層な団体のネットワークを構成し、相互に情報収集、発信をはじめ地域のさまざまな活動を行っている。平成 19 年からは災害時の要援護者の避難支援に取り組んでいる。住民の要望をアンケートで確認し、行政や神戸大学と合同で「竜が台支えあい活動会議」を開催し、検討を重ねながら推進している。具体的には、手上げ方式で要援護者と支援者を募集し、民生委員や自治会の協力によって要援護者とのマッチングや支えあいチームをつくっている。また、年に 1 回、要援護者と支援者が顔を合わせる避難訓練とアンケートを行い、今後の進め方を協議している。平成 23 年以降は「のぼり」や「いつでも蛇口」の導入、AO 版の地図を用いた「わいわい会議」の開催、命を守る実践の手引き」の作成や安否確認用タオルの導入、N コードを用いて短時間に居場所を性格に伝える安否確認訓練も実施している。



＜神戸市社会福祉協議会 福井 徹氏＞ 「つながり」をカタチに、地域のチカラに

社会福祉協議会（以下、「社協」）は社会福祉法に基づいて全国の都道府県、市町に設置され、市民（地域団体等）と福祉事業者、行政等により構成される。主な役割はボランティア活動や地域の助け合い活動の推進で、「皆さんとともにある社協」としてさまざまな地域団体と一緒に活動している。社協は人のつながり、地域のつながりを形にし、地域の力にしていく仕事である。阪神淡路大震災でははじめの3ヵ月に約117万人のボランティアが支援を行った。仮設住宅は震災3日後から着工し29,178戸建設され、復興住宅は7,536戸建設された。仮設住宅があった平成7年～11年の間に233名、平成12年～26年に864名の独居死があった。独居死は、地域のつながり、地域社会が脆弱になる中で、一番弱い独居高齢者が置き去りになって起きると考えている。神戸市社協は平成9年に全区社協に地域福祉活動コーディネーターを配置し、平成13年にはすべてのあんしんすこやかセンター（地域包括支援センター）に見守り推進員を配置した。震災前と現在を比較すると、友愛訪問グループは1,044から1,430に、ふれあい給食グループは160から261に増えた。震災時、救助活動になすすべがなかった悔しさをばねに、人のつながりをつくり、普段の暮らしの中でも「豊かな暮らし」、「災害に耐える町」を作ろうとしてきた。住宅構造でなく、つながりの輪が生死を分ける。復興への思いが人ととのつながりを推進することが大きなテーマである。



＜東日本大震災第一次神戸市災害対策派遣隊長 丸一功光氏＞ 大震災からの問題提起



神戸は六甲山と海の間の狭い土地に市街地がある。昭和30年頃の高度経済成長時代から人や産業が神戸に集まってきたが、狭い市街地では支えきれず、須磨区に高倉台、横尾、名谷の住宅街を造成し、山間部の土を使ってポートアイランド、六甲アイランドができた。神戸はもともと水害が多い街で、神戸市は「水害に強いまちづくり」を目指してきたが、大震災は想定外であった。阪神淡路大震

災はM7.3、震度6～7の大都市直下型地震で、死者4577人、行方不明者2人、負傷者14,678人であった。倒壊家屋は67,421棟、半壊55,145棟、焼失面積は819,108m²、交通ネットワークやライフラインは寸断した。水道局があった市役所の2号館6階部分が崩れ、余震が続く中、職員が図面等の必要なものを取り出して災害に対応した。また、職員の42%が被災者になった。災害は高齢であろうが関係なくやってくる。震災から10日後まで29.7%の人の安否確認情報がわからず、被害がいかに大きかったかがわかる。

これは東日本大震災の写真の一部で宮古市役所4階からの写真である。真ん中に道路標識がみえるが、この高さまで津波がきた。山裾の近くの住宅では津波で2階に避難したが火災で逃げ場がなくなった。津波は水だけでなく火災も起きる。車のガソリンが海水と反応してバッテリーで引火し火災が起きた。



＜座長＞

パネリストの発表について災害時、講師の永坂さんからコメントをお願いしたい。

＜永坂氏＞

体験の中で生まれた意識、認識、繰り返す中で新たな気づきがある。再び災害が起きた時に活かせるために、体験や気づきを「伝えていく」ことが大切で、私自身もそれが使命と考えている。

<座長>

震災を通じて築いてきた地域のつながりや地域活動について、一言ずつお願ひしたい。

<佐々木氏>

震災当時は皆、生きるための戦いで、「お金に頼り、人に頼らない」傾向が出てくるが、「それではいけない、防犯活動をしていこう」と呼びかけると人が集まつた。共通の目標をつくることでのいいつながりができた。最初は3人1組で24時間見守りに廻り、挨拶をするうちに「一緒にしましょう」と声が出る。こうして人の心のつながりができた。

<川原氏>

竜が台地区では小動物への虐待の発見を機に緊急パトロールをはじめた。呼びかけると意外と人が集まり、たくさん的人が仕事の後に駆けつけてくれた。何かあったときに皆で協力しようという心があるか、呼びかけに応える声があるか、そして住民が自分達の町をよくしていこうと思えるかどうか。地域にはいい人がたくさんいる。そういう気持ちを醸成できるかどうかが大切。

<福井氏>

助け合いには、自然発生的にできた住民主体の活動と、施策として全市をあげて取り組む活動の2つがある。後者の場合、行政や社協が地域にお願いに廻り、本音も交えて住民が納得するまで話しあうことが大切。友愛訪問も今では民生委員さんから「私たちの中心の活動だ」と言ってもらえるまでになった。納得できるまで説明し、共感を得ていくことが大切。

<丸一氏>

阪神淡路大震災時、164000人の市民が閉じ込められ、128000人は自力で脱出、35000人が救助された。その中で警察や消防による救助は7200人で、27100人(77%)は近隣住民が助けた。地域のつながりがいかに大事かわかる。

仙台市では新潟市が政令市の中で最も早く支援に入った。次いで神戸市。新潟市は「震災は太平洋側と日本海側同時には来ないので相互に助け合うこととしている」と全面的に支援した。

<座長>

地域包括ケアシステムの構築を推進の1つとして、本学では地域の暮らしを理解できる看護師の育成に向け、学生が地域の交流拠点で住民の皆さんとの交流を通して学び、育てていただく取り組みを行っている。超高齢社会の中で、いかに日常の中に地域のつながりをつくり、活かしていくのか、パネラーの皆様からご意見をいただきたい。

<佐々木氏>

「困っているから手伝おう」いう気持ちと「ありがとう」という感謝の気持ちが大事だが、「お返ししなくては」となると、どちらも精神的な負担になり継続ができない。介護保険制度によって地域の関係性が希薄になっているというのは、お金で関係性の煩わしさを避けようとしていることかもしれない。それが問題。相手に気配りさせないように自治体が助成し地域の自治会の予算として手伝うという形があれば継続していくものになるのではないか。

<川原氏>

地域の「顔見知り」をつくるために挨拶運動を大切にしている。普段から公園のラジオ体操など集まる場をつくり、それを市の健康増進事業として位置づけてもらい、助成を受けた活動もしている。何かあれば集まって話ができるという場が必要。先ほど永坂さんの「3分5分の法則」の話で、自分の地区にも高齢者には遠いかも知れないと気づき、改め見直してみようと思った。

<福井氏>

かつて経験のない超高齢社会に入り、気持ちや掛け声だけではつながりは難しい。実効性のあるものが必要。お金を使って一時のサービスをしても介護保険と同じであり、介護保険制度もこのままでは持続が難しい。既存のルールでは無理なので、地域、団体ごとにあった形で、これまでの概念にはないことも含めて肯定していかないと一人ひとりを支えることはできない。行政の公平ルールとは少し異なるが、これまでと違った価値観も必要になる。

<丸一氏>

神戸市の人口 153 万人だが、15 年後に 146 万人になり、以後も人口が減る。神戸市はこれまで人口増加に合わせて街が広がってきたが、これからは街であったところを山に返すようになっていく。そういう時代がくるのではないか。そのときに「地域とは何か」が問われてくる。人口に合わせて小学校統廃合があると地域の様相が変わる。地域の原点は小学校区だが、向こう三件両隣の助け合いを今一度見直すことが必要である。

<座長>

個々のコミュニティにあった支援、住民の目線に立った行政支援の必要性があがつた。住民主体の活動を支え、「居場所」に行けなくなった時にどうするのかを考え、住民と行政、社協がともに取り組む必要があることが重要だとわかった。永坂さんからもう一言コメントをお願いしたい。

<永坂氏>

住民と行政と社協、あともう 1 つ、医療の重要性がある。障害や疾患をみると住民だけでは対応が難しい。住民は「自分が何か手助けして悪化したら怖い」と考へるので、そこに医療がしっかりと入っていって住民に寄り添っていくことが大事。こうして神戸市看護大学のように、住民の中に入って住民の暮らしや健康との関連の中で看護を学ぶという取り組みを今後も推進してほしい。

<座長>

地域包括ケアシステムの中でさまざまな職種や基幹が連携協働していく必要がある。本学の COC 事業は来年が最終年度になるが、今までのことを積み重ね、今後も推進していきたい。

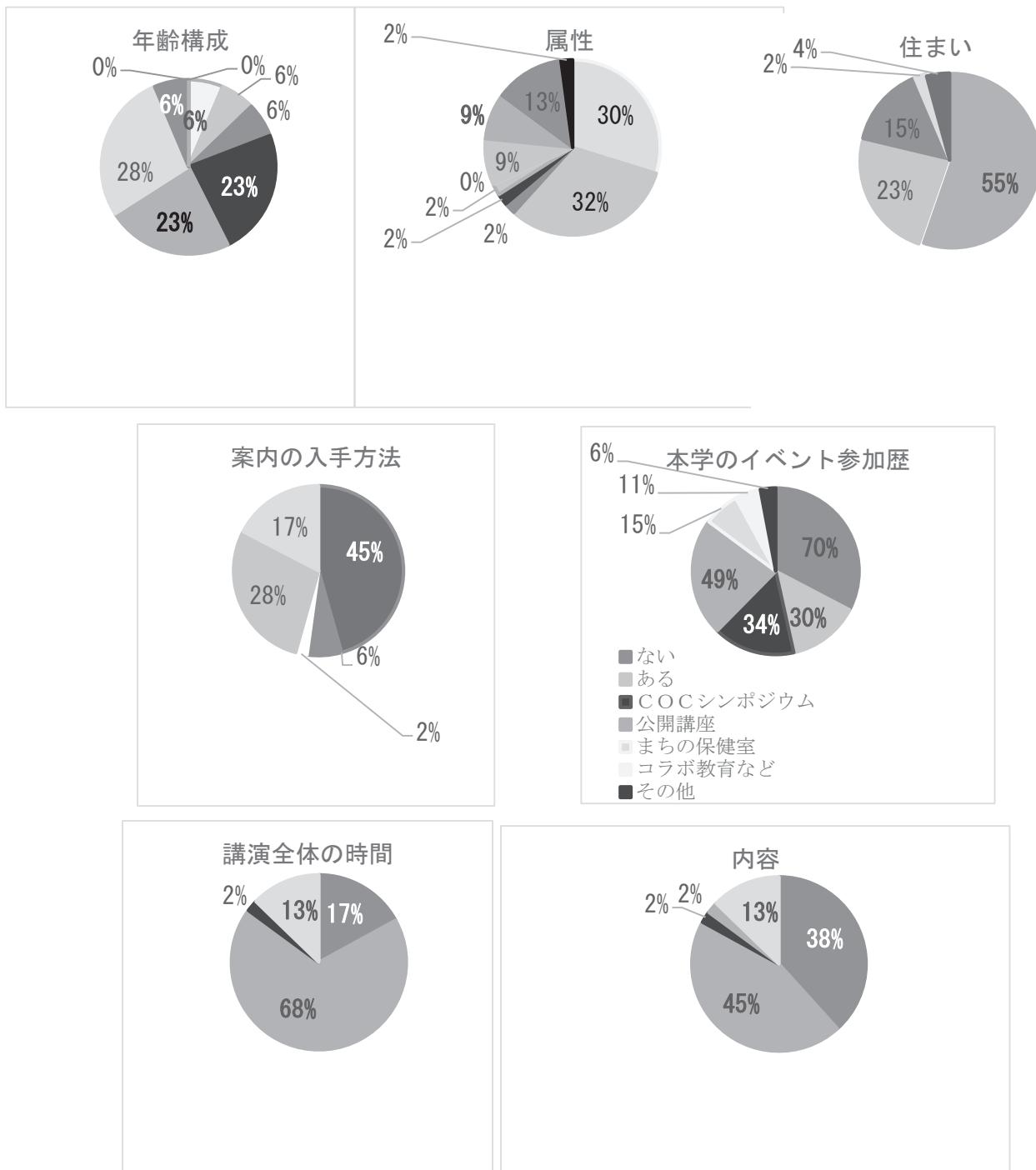
【閉会挨拶】二宮啓子 神戸市看護大学 副学長

本日は「災害に強い地域づくり」をテーマに、永坂氏やパネラーの皆様から貴重なお話をいただき、コミュニティの大切さを改めて考えさせられました。私は西区に住んでいますが、自治会活動に班長として参加したことを機に、地域の顔の見える関係の重要性を感じました。そして、一人ひとりが人のつながり、地域のつながりを考えながら拡げていくことの大切さを感じました。

本学では、COC 事業を通して、学生が住民の生活拠点で住民と交流しながら学び地域指向性を高める取り組みをしてきましたが、人材育成と同時に、地域力を高めるための支援を行うことも大学の使命だと考へていますので、今後も学生と一緒に、住民の健康支援について考えていきたいと思っています。本日は参加者の皆様も積極的に意見交換に参加していただきました。これも神戸市の地域の力になっていくと思っています。皆様に心から感謝申し上げます。

参加者アンケート結果

参加者 52 名 アンケート回収数 47 名 (回収率) 90.4%



<講演・パネルディスカッションの感想> (一部抜粋)

○地域のつながり、地域包括ケアについて

- 心に響く講演をありがとうございました。日ごろの地域活動は知らないことが多いと思います。「地域の力」を今一度みつめ直すときだと思います。
- 日ごろの住民のつながり、関係が大切だと感じました。地域包括ケア研究所の最新の報告書

にも記載してあるが、今日、その大切さがわかりました。

- ・災害と地域づくりについて、自分達は何ができるのかを考えさせられるよい機会となった。
- ・災害時に備えた地域のつながりの重要性、また、災害時だけでなく、日ごろからの「つながり」の大切さを改めて感じました。
- ・現場対応の話が聴けて参考になった。再び起きることを意識して行動につなげたい。長期的な地域のあり方を考えた対策の必要性を感じた。
- ・日々の活動の中にまちづくりがある。大きな力になる。
- ・介護保険がふれあいを奪っているというのは目からうろこでした。そういえば最近高齢者をみていなきことを再確認させられた。それまではよく会っていたのに、その人に対して誰も関心がなくなったように感じていた。考えていくと恐ろしいことだと思った。
- ・11歳の娘をもつ母です。今回の講演は娘に聴かせてあげたかったです。小さいうちからわかりやすく教えれば、子どものほうが早く理解できるのでは。子ども達が未来を創ってくれる信じています。地域の方の活動も教える必要があると思います。

○基調講演について

- ・永坂さんのお話、たいへんよかったです。阪神淡路大震災から振り返りができました。
- ・実際に経験されたことを話されたので、心に響くものがあった。
- ・介護保険が近隣や家族との関係を薄くしているという永坂氏の指摘が新鮮でした。
- ・全体によいお話をうかがってよかったです。特に永坂さんのお話は心に残りました。

○パネルディスカッションについて

- ・パネラーの方々のお話が興味深かった。
- ・須磨区中部自治会の取り組みは心のつながりを重視している。日常的なつながりこそが肝要なんですね。
- ・竜が台地区の取り組みは、構成団体の円滑なコミュニケーションがうかがえる。うらやましく思えます。
- ・地域の震災の対応に関して、いろいろと知ることができたので、現在の対応策を再度考えてみようと思いました。

○講演全体の感想や今後の課題について

- ・もう少し時間があっても（いい）と思いました。他のテーマについても話し合いたいです。
- ・住民流儀の活動を支援していく大切さが、実践活動をしている人の話でよくわかりました。
- ・実際の取り組みなので、わかりやすく、もしものときに動ける具体的な内容もあった。
- ・災害の被害のニュースはほんの一部で、メディアでは報道されない現実は、それを目の当たりにみて体験された方にしかわからない。そして風化される。忘れかけていた「今、自分に何ができるか」を改めて問いかけ、明日からの自分を見つめたいと思います。

(報告者：地域連携教育・研究センター 石井久仁子)